

Ⅲ 実態把握

いじめに対する指導やいじめの実態把握を定期的に行っていくことが必要であるという理由の一つは、いじめが一部の特定の子どもだけが関わって生じる問題ではなく、状況次第で誰もが加害者・被害者になりうる問題だからです。

「未然防止」とは、「いじめが起きないようにすること」です。したがって、すでに起きている「いじめ」の「早期発見」とは区別する必要があります。実態把握についても、「未然防止のための実態把握」と「早期発見のための実態把握」を明確に区別してとらえることが重要です。

1 「早期発見」「未然防止」のための実態把握

何気ないしぐさや表情、発言等には児童生徒理解につながるものがたくさんあります。いじめを早期に発見するためにも、いじめが起こりにくい風土づくりのためにも、児童生徒個々の小さな変化や学級の状況を捉えるために、教員の高い意識が重要です。様々な場面、視点で日常観察を行うとともに他の教職員や保護者、地域等からの情報を収集し分析する必要があります。

また、定期的実施する児童生徒を対象にしたアンケートもたいへん重要です。「早期発見」という視点で記名式アンケートが行われることもありますが、無記名アンケートから把握した学級や学年・学校全体の状況をもとに未然防止の取組をすすめることも重要です。

(1) 日常の観察

一見ただけでは、落ち着いて授業に望んでいる、仲良く遊んでいる、人間関係はいつもの通りであるかのように見えます。しかし、何か心に引っかかっていることがあると、子どもはサインを発しています。授業中はもちろん、休み時間や、放課後の雑談の機会等にも、児童生徒のちょっとした言動や服装・持ち物等の変化など、気になる様子に目を配りましょう。

場面：授業、休み時間、清掃時間、昼食時間、部活動（クラブ活動）など

視点：顔色、姿勢、学習態度、言葉遣い、行動、表情、視線、声をかけたときの反応など

物品：教科書、ノート等の学用品、身の回りの物、机の上の落書きなど

① 日常の学校生活と比べた表情や言動

- 日ごろと違う表情(視線に注目)をしていませんか。
- いつもより、少し元気がない、前向きな行動ができないことはありませんか。
- 理由のはっきりしない遅刻や欠席がありませんか。
- 落ち着きがない、おどおどしている等の様子はありませんか。

② 他の児童生徒と比べたときの表情や言動

- 友達からのあいさつや言葉かけが少ない児童生徒はいませんか。
- コミュニケーションがいつものように取れない児童生徒はいませんか。
- グループ活動ではいつも雑用のような仕事をうけもつ児童生徒はいませんか。
- グループをつくるときにいつも最後まで残っている児童生徒はいませんか。

③ 特定の児童生徒への対応

- 一部の友達と常に距離をとろうとしていませんか。
- 一緒に遊んでいる友達に、異常なほどの気遣いをしていませんか。
- 特定の児童生徒が失敗すると、やじられたり、笑われたりしていませんか。

④ 学級の雰囲気

- 学級全体に無気力感や重苦しい雰囲気が漂っていませんか。
- 一部のボスのな児童生徒を中心に小集団化していませんか。
- 対立関係や他の児童生徒を排除・馬鹿にするような雰囲気はありませんか。

(2) 「チェックリスト」の活用

「いじめ」の兆候にいち早く気づき、早期に対応するために児童生徒が発する「サイン」にきめ細かな注意を払い、実態の把握に努める必要があります。

学校や家庭で注意しておきたい観察ポイントをチェックリストにし、随時活用することで早期発見につながります。

もし、気になる点が見られた場合は、学校全体で共通理解を図るとともに、保護者との連携、友人関係等からの情報収集を行い、事実関係を把握しましょう。

(3) 聞き取り調査

この方法は、顔を見ながら話を聞くことができるので、言葉の微妙なニュアンスや表情・しぐさなどから、比較的細部にわたった調査が可能です。また、時間的な制約も少なく、手軽に実施することもできます。

しかし、周りの人に調査を行っていることを知られる可能性が大きいので、場の設定を慎重にしなければなりません。

(4) 無記名アンケート

この方法の利点は、現在進行中の深刻な事例ほど、「記名式」には回答しにくいものです。

したがって、早期発見には、「無記名式」が有効です。いじめがどの程度起きているのか、いじめを受けている子どもがどの程度存在するのかなど、潜在化したいじめを把握する資料にします。

① 「無記名式アンケート」実施上の留意点

- 無記名アンケートは被害者や加害者が誰なのかを知るためではなく、結果を踏まえつつ、すべての児童生徒を対象に、予断をもちずに観察したり、対策を講じたりするためであることを教職員全員で認識することが大切です。
- アンケートは、速やかに実施・集計でき、簡単なものを、定期的に繰り返し実施することが大切です。(学年・組・性別の他、5～10項目程度の質問に絞る)
- アンケートの内容以上に注意してほしいのは、実施時の雰囲気です。簡単なアンケートであっても、ふざけたりしないで素直に答えることを伝えます。また、回収後も児童生徒の目の前で封筒に入れるなど無記名で匿名性を守る姿勢を見せることが大切です。(タブレットを使ったアンケートは、周りの目を期にせず回答しやすい利点があります)

② アンケートの実施時期

(ア) 定期的な調査

定期的(例えば、6月・9月・2月など)に調査することで、児童生徒一人一人の変容を捉えることができます。いじめの認知は年度の前半(特に1学期)に集中する傾向があります。年度初めの5月頃は、新しい学年が始まって約1ヶ月が過ぎ、次第に友人関係が固定化してくるころです。また、夏休みや冬休み明けなども児童生徒の交友関係が変化しやすい時期です。

(イ) 学校行事の前後の調査

学校行事の前後には、グループ間やグループ内でのトラブルが発生することがあります。人間関係のトラブルを未然に防いだり、早期に対応したりするために、アンケート調査は有効です。

(ウ) 学級の雰囲気が悪いと感じたときの調査

学級全体に無力感が漂っていたり、一部の児童生徒が他人を馬鹿にしたりするなどの雰囲気をつくっていたりすると、いじめ等の人間関係のトラブルが生じやすくなるものです。担任や教科担当者等が、学級の雰囲気が悪いと感じたときは、アンケート調査を実施することで原因の究明につながると考えられます。

早期発見・未然防止のために、実態把握に努めることは大切です。しかし、せっかく子どもの変化や実態に気付いても、教員が問題と捉えなければ支援に結びつくことなく、状況を悪化させることにつながりかねません。また、対応が必要だと捉えても適切な指導や支援を行わなければ、いじめをはじめ子どもの問題が深刻な状況に陥ることが心配されます。

日常の観察から得られるエピソード等から児童生徒の変化を捉えるよう高い意識をもつとともに、把握した情報を複数の教員で共有し多面的な視点で児童生徒理解を進める必要があります。そして、その上で適切な指導や支援をチームで考え、組織的に実践することが重要です。

そのためにも、複数の教員による支援検討委員会は効果的で、「個人や集団の問題状況の把握」から「対応策の検討と決定」「実践」「評価」という流れを通して状況の改善を図ることができるとともに、教員一人ひとりの資質向上にもつながります。結果的に学校としての組織力が高まることとなります。